
恋想い出

歩緒路李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋想い出

【Nコード】

N3568J

【作者名】

歩緒路李

【あらすじ】

高校の先輩・高梁^{たかはし} 惇^{あつし}と後輩・小林^{こばやし}真弓^{まゆみ}の恋物語。
少し懐かしい80年代の恋愛模様。甘くもあり、切なくもあり、最後には意外な展開へ……。

先輩と私の恋物語

「小林さん。来週の土曜日、空いてる??」

涼やかな眼で見つめながら、高校の先輩・高梁たかはし 惇あつしが言った。

「どうしてですか?」

私、小林真弓こばやし まゆみは、少し微笑みつつも、ジラすような応対をした。
た。

「土曜日、空いてれば東京デイズニerlandに行かない? 駄目かな??」

(なっ、なんて率直に言うんだらう。高梁先輩。)

顔が紅くなり、動揺する心を抑えながら、

「それは、デートのお誘いですか?」

「そうだよ。駄目??」

その涼やかな眼で、真っ直ぐ私の眼を見る。

高梁先輩とは、高校の図書委員で知り合い、先輩が3年、私は1年。当時の高梁先輩は、年上の女性と付き合っていると聞いたり、一日で二人〜三人と付き合っのが当たり前前のプレイボーイ(死語?)ぶりだった。

そんな先輩を私は、

(なんて、嫌な奴!!女の敵よ!!)

と、嫌悪感を抱いていた。

高校生活もお互いに卒業し、久しぶりに図書委員の同窓会で会い、二次会のボーリング場にて、

「土曜日、空いてる??」

と、言ってきたのだ。

「先輩は、確か年上の人とお付き合いしてませんでした?」

「あつ、高校の時ね。去年、別れて今はフリー。」

「本当に?。怪しいなあ。」

「ほつ、本当だよ。今は、彼女はいないよ。」 かなり焦って、しどろもどろな先輩。

クスッ

「あつ。俺、もしかして、からかわれてる? まいっただな。」

涼やかな眼が三日月のように優しく、微笑む。

「ごめんなさい。からかうつもりじゃないんです。なんで私を誘うのが不思議で、つい……。」

「なんで、って。可愛くていいなあ」と想って、色々考えてから、声をかけたんだよ。」

顔を真っ赤にしながら、下向にうつ向いた先輩。昔と比べて、だいぶイメージが違うのに心が揺さぶられ、私は、

「来週の土曜日、デイズニールランドへ連れてってくださいますか??」

〈続く〉

あの誘いから、一週間後。高粱先輩と、デイズニールランドへ来た。

天気は、雨。

別に迷信とか信じる訳じゃないけども、初めてのデートに雨とか降ると、その相手とは、うまくいかない．．．．．な〜〜んて、聞いたことあるけども、本当に雨降りとは．．．．．。

デイズニールランドの雨

憂鬱。

そんな私を気遣うように、

「小林さん。傘一本で二人入っているから、もう少し俺の方に来ないと、濡れちゃうよ。」と、私の左腕を引き寄せる。

『何だか本当に、恋人同士みたい。』

期待に胸を、ときめかせながら先輩の右腕に、私の左腕を入れてカッブルのように腕を組む。

「えっ。」先輩がたじろぐ。

「どっ、どうしたの？ 腕を組んできて。」動揺しつつも、顔は半分、嬉しそうな先輩。

「雨で濡れちゃうし、手を繋ぐのも変だから、腕を組んでみたの。

嫌なら、はずすけど．．．．。」

「いつ、嫌なことある訳ないだろう〜。案外、小林さんって、甘えん坊なんだな。」、顔を赤くしながら私をたしなめた。

「えへへっ」、ペロツと舌を出した私。

そして二人は、ホーンテッドマンションやカリブの海賊等を周り、待ち時間が3時間でも、高校の頃の話や車の話、本の話、家族の話
e t c 話が尽きなかった。

雨は、止むことなく降り続けている。

「寒くない？」優しく話かけてくれる先輩。

「はい。大丈夫ですよ。」と、返した瞬間。

私の左手を、ギュツと握る先輩の右手。
私の方が、熟れた林檎のように顔を真っ赤にされながら二人で、デ
イズニーランドの園内を遊んだ。

午後五時。デイズニーランドの駐車場。

雨は降り続けている。

先輩の車に乗り、かなり車内が冷えてるので暖めている間、二人は
一言も話さず、ただ、何処かを見つめている。

『先輩……何か悩んでいる？ 車に乗ってから何も話さなくな
るし……どうしたんだろう？』一抹の不安が私の心に押し寄せ
る。

だいぶ長い間、雨の音と暗い中に、幾つものぼんやりとした外灯の
景色だけが静かに流れていた。

「小林さん！」

突然、名前を呼ばれて驚く私。

「はっ、はい！！！」

前だけ見ていた先輩の顔が、私の方に向き、「小林さん。俺と付き
合って下さい。」

雨のデイズニーランド その駐車場で、告白されました。

突然過ぎて、豆腐で頭を殴られた感じの衝撃で言葉が出ないのを
何とか出して、

「一分だけ待って下さい。」

く続くく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568j/>

恋想い出

2010年10月8日23時25分発行